

センターパターン

評論
16

傍線部自体を言い換えるパターン

↓傍線問題の解答の根拠が本文中になく、傍線部自体にしかない場合、傍線部自体をそのまま言い換えた選択肢が正解になることがある。

センター評論では、傍線問題は基本的に傍線部の前か後の本文中に解答の根拠があり、それを解法パターンで探していく。しかし、非常にまれに「傍線問題の解答の根拠が本文中になく、傍線部自体にしかない」というケースがあるので見ておこう。

例題

狩野敏次「住居空間の心身論——『奥』の日本文化」

近代の空間が失ってきたのは、実は深さの次元である。近代建築がめざってきたのは明るい空間の実現であった。ピロティ、連続窓、ガラスの壁、陸屋根は、近代建築が明るい空間を実現するために開発した装置である。人工照明の発達がそれに拍車をかける。明るい空間が実現するにつれ、^A視覚を中心にした身体感覚の制度化がすすんだ。視覚はものと空間を対象化する。空間は測定可能な量に還元され、空間を支配するのは距離であり、ひろがりであると考えられるようになった。

この問題は、「理由説明問題」なので、解法パターンに従って傍線部の前後を読む。しかし、傍線部の説明に該当する記述が見つからない。一瞬焦るが、実はこれは**傍線部自体を言い換えて正しく説明してある選択肢を選ぶ問題**だ。傍線部Aと正解の選択肢とを並べて比較してみると、以下のようになる。

○傍線部A

視覚を中心にした身体感覚の制度化がすすんだ

② 身体感覚相互の優劣関係が

視覚を軸にするかたち

統御されてきた

こうしてみるとわかるように、選択肢②の各要素が、傍線部Aの言い換えになっていることがわかる。本来ならば、「視覚を中心にした身体感覚の制度化がすすんだ」という傍線部分を言い換えたり説明したりしている箇所を本文中から探し出し、その内容を含む選択肢を正解として選ぶところだが、この問題に関してはそうした内容を本文中から探し出すことはできない。どうしても本文中に根拠を見つけ出すことができない場合、今回のように「**傍線部自体を言い換えて正しく説明してある選択肢を選ぶ**」というパターンがあることを頭の片隅に置いておきたい。